

東日本大震災

被災地支援の現場から… そして今、岡山大にできること

3月11日に発生した東日本大震災は死者・行方不明者合わせて2万人以上という未曾有の被害をもたらした。岡山大学も発生直後から支援物資の提供や、医師派遣などを行い、被災者を支援した。
被災地で活動した医師、学生に現地の様子や思いを振り返ってもらう。



▲石巻市では、泥かきのボランティアを行った（瀬沼さん提供）

鼻をつくにおい、傾いた電柱に垂れ下がった電線…。目の前に広がる田園風景は津波の爪跡を色濃く残していた。「不自然な風景のほずなのに、自然に見えた。とても不思議な感覚でした」。4月30日～5月4日まで、宮城県石巻市でボランティア

活動に励んだ環境理工学部4年瀬沼里沙子さんは振り返る。
瀬沼さんはボランティアを募るバスツアーに一人で参加。お寺や民家の泥をかき出す作業を手伝った。活動は3日間。何層にも重なる油やヘドロをスコップで集め、土のう袋に入れる。「どんな顔で作業して、何て声を掛ければいいのか分からなかった。ぎりぎりまで頑張っている人（被災者）たちに、頑張つてとは言えなかった」。

被災地での出会い、活動を通じて、いろいろなことを感じたという瀬沼さん。「五感で感じることでできてよかった。自分が見たこと、感じたことをできるだけたくさんの人に伝えたい」。今後は活動報告会を開いて経験を話したり、被災地への再訪も計画している。

被災地でボランティア活動した学生や教員らによる報告会が6月16日夜、学内であり、体験談を基に、学生ら約50人が今後の支援の在り方を探った。
学生と教職員の有志約10人が中心となり、企画。被災地へ赴いた8人を講師に招き、グループ討論形式で、

話し合った。8人は写真や映像を交えて、現地の様子を紹介。参加者の中には、ボランティアへの参加を予定している学生もあり、「被災地の様子がよく分かった」「積極的に情報収集し、役に立てる人材になりたい」などの声が上がった。



▲活動報告会

県立大船渡病院で診療支援に
当たる岡山大学の医療支援班▼



岡山大学救急医学講座
寺戸 通久

緊急医療援助派遣に参加して

平成23年3月11日発生の東日本大震災に対し、岡山大学病院は3月16日から4月21日まで計12班の医療支援班を岩手県に派遣しました。

私は第7班（4月3日～6日）、第8班（4月6日～9日）の責任者として医療支援に参加しました。この頃になると医療ニーズは急性期外傷ではなく、劣悪な環境下での内因性疾患の発症、持参薬流失による慢性疾患増悪が問題になりつつあり、それを受けて我々は岩手県立大船渡病院救命救急センターでの診療支援に携わりました。医師、看護師は主に救命救急センター支援を行い、薬剤師は集積された支援医薬品の整理、被災者への処方支援に当たりました。歯科医師、衛生士は現地保健師、歯科医師会と協同して避難所巡回診療に当たりました。

大船渡病院は高台にあるため津波からは無事でしたが、近隣医療機関が壊滅状態のため、「最後の砦」として一切、救急依頼を断れない状況を強いられており、病院スタッフの心身の疲労は大変な

ものでした。患者さんは東北人の我慢強さ、遠慮深さのせいか、通常では考えられないほど状態が悪化してからの来院・搬送が多く、治療も及ばず不幸な転帰を辿る方も少なくありませんでした。

診療支援の合間に、被災地現場の視察も行いました。実際に大津波の被災現場に立ったとき、360度ほぼ全て地平線が見渡せるような規模の被災状況を目の当たりにして、私は不覚にも言葉を失いました。見渡す限り地平線まで続く瓦礫に、恐怖すら覚えました。

現在、福島原発事故に関する報道ばかりで、たまに地震津波災害関連が報道されたと思えばお涙頂戴の美談仕立てのもの、行政の不備に怒る被災者の罵声をクローズアップしたものばかりになってしまっています。しかし、多くの被災者は今も黙って耐え続けています。復興は一朝一夕になるものではありません。決して被災地の事を忘れず、今後も様々な形で支援を続けていく必要があると思います。

教職員らでつくる災害支援対策本部は3月18日、鳥取、島根、徳島、鳴門教育、香川、愛媛、高知の7大学から寄せられた食料、飲料水、医薬品などの支援物資をとりまとめ、岡山大学が確保した10トントラックで、東北大学に発送。同大の学生や教職員を通じて被災者に届けた。教職員有志からは多額の義援金も寄せられた。



▲支援物資をトラックに積み込む
岡山大学の職員ら